

小中学校国際交流支援プロジェクト ～ぬいぐる留学「テディベアプロジェクト」～

団体名●清水ゼミナール／代表者名●清水和久(人間科学部こども学科教授)

はじめに

学校現場で国際交流プロジェクトを行うには、まず交流相手の外国の学校を見つけ、交流の日程の調整や具体的内容を決めていかねばならず、交流が初めての教員には難易度が高く感じられる。そこで、将来小学校教員をめざす学生が多い清水フィールドでは、国際交流を支援すべく、金沢の学校と外国の学校との間を取り持つ国際交流支援を行った。その中で学生は、プロジェクトをおこなう教師側の取り組み方法を知ること、プロジェクトに参加する学習者の気持ちを持つことの2つ視点で国際交流体験をすることを目的とした。

活動計画

- 1) 国際交流導入ワークショップ授業の実施
- 2) 国際協働学習研究会の開催
- 3) 国際交流の支援の内容(4つ)
- 4) 外国の交流小学校への訪問(今回は中止)

活動内容

1) 国際交流導入時のワークショップ授業

小学校の総合的な学習の時間で学習課題を持つためには、最初に共通体験が必要だといわれる。例年、世界のことに興味を持ってもらうために、最初に「世界がもし100人の村だったら」の体験型ワークショップをおこなっていた。このワークショップでは、世界の就学率や識字率の問題のクイズを出したり、参加型の劇で表現したりしていた。



図1 Zoom上でおこなった3年生ワークショップ

今年度はコロナの影響もあり、訪問できず6月にワークショップをzoom上で行った。学生は世界の

国の人々の役割を自宅から演じ、薬を取りに行くが文字が読めなくて困るという識字問題を考える劇をzoom上で再現した。このzoom劇は四十万小学校6年3クラスに対して1クラスごとに3回行われ、児童は学校の教室から大学生とのやり取りをして、世界の識字率や就学率などの理解を深めた。小学生には、世界のことをもっと知りたいという思いを持ってもらい。以後、台湾の小学校との交流につなげていく。

2) 国際協働学習研究会の開催(月1回)

台湾の小学校の新学期は9月からであり、実際の国際交流のスタートは小学校の2学期からとなった。学生は9月の教育実習を済ませた後、第1回のキックオフ会に参加。

表1 参加の小中学校のペア

日本側の参加小中学校	台湾の小学校
金沢市立四十万小6年	嘉義市精忠国民小学校5, 6年
金沢市立大野町小6年	高雄市立新甲国民小学校6年
金沢星稜中1年2クラス	嘉義市立宣信国民小学校6年
金沢星稜中1年1クラス	嘉義市精忠国民小学校6年

第1回目には日本側の教員と台湾側の教員がZoomで顔合わせを行い。交流のスタートとした。その後、日本側だけで月1回の定期的な研究会を実施した(9月、11月、12月、2月)自己紹介カード作成のアドバイスや、金沢紹介のビデオ作成、TV会議の実施方法などの課題を研究会で話し合い、解決していった。

3) 国際交流時の具体的な支援内容



図2 テディベアプロジェクトの構造図

①国際交流テディベアプロジェクトとは？

ぬいぐるみを交換留学生として交流校に留学させ、そこでの生活風景を日記や写真で交流し合うも

のである。最終的には、留学生は自国にたくさんの思い出を持って帰ってくることになる。相手国から来たぬいぐるみの留学生の目を通して日本の紹介をするとともに、台湾からは、日本から留学したぬいぐるみの滞在記が届くことになる。

②金沢紹介ビデオの作成

金沢市内の6年生は10月に金沢探検をし、市内の様子を紹介するビデオを作成する予定であった。しかしコロナの影響で実行できなかった。そこで大学生が、6年生がいけなかった金沢城、兼六園、歴史博物館などを訪問し、紹介ビデオを作成した。わかりやすいように英語の字幕もつけて youtube にアップして台湾に伝えた。教員になった場合今回のような作業は必要になってくるので、学生にとってもよい体験となった。

③プログラミング教育と国際交流の融合

台湾からも同様に市内の紹介ビデオクリップが届いた。このビデオクリップを単体では児童に見せず、星稜大の地域プロジェクト「キッズアカデミー」で四十万小学校にプログラミングの出前授業を行っていることと関連させることとした。具体的には、3年生が台湾の嘉義市の地図を作り、各観光名所にはビデオクリップとリンクさせた QR コードを配置した教材を作成した。

四十万小学校の児童は、プログラミングしたレゴマインドストーム EV3のロボットカーを操作して、台湾の嘉義市の地図上で市内探索をした。



図3 台湾の烏山頭ダムを紹介動画

④中学校での台湾紹介授業

大学生は、台湾の文化や遊具などを調べ、中学校に出向き、台湾についてのプレゼンを行った。具体的に

は台湾の子供たちの遊具チャイニーズホイールの実演や、台湾の教育、文化などについてクイズ形式で紹介した。大変好評であった。学生も生徒の前でしゃべる機会を持って自信をつけたようである。

成果、結果の考察

毎年、国際交流の支援として1月に台湾の小学校を学生が訪問し、帰国後日本の小学生に報告している。今年度はコロナのために台湾に行くことはできなかった。しかし、コロナ禍でも、学生が活動を考え、新たな形でのかかわりを考えられたことが成果となった。具体的な成果として以下の4点を挙げる。

- ・オンラインのワークショップを考案し、小学生とやり取りがある双方向のワークショップができた
- ・市内の観光地に学生が小学生の代わりに訪問し、英訳付きのわかりやすい市内紹介ビデオクリップを作成できた
- ・新たに、プログラミング教育と国際交流とを融合させた教材を作成できた。次年度の新たな企画のヒントになる活動となった
- ・中学校とのかかわりは今回が初めてであった。中学生の前で台湾のことを工夫してプレゼンできたことは大きな自信となった。

今後の課題、展望

次年度も小中学校での台湾との国際交流の支援をおこなう。小学校では、英語が外国語として教科化されたので、今後は英語を使う場面としての国際交流プロジェクトが現実味を帯びてくる。また中学校でも国際交流をベースとすることで英語の必然性を感じることができる。このような国際交流プロジェクトに参加し、カリキュラムを考え、実行できる力を学生時代に身に着けることで、小学校教員になった時の強みになると思われる。次年度はぜひ台湾の小学校を実際に訪問し、その報告会を日本の小学校や中学校で行い、国際交流支援のまとめとして完結させたい。